



Title	迎田秋悦と工芸研究 : 宮崎タンスにおける研究会をめぐって
Author(s)	下出, 茉莉
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 24-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67715
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

迎田秋悦と工芸研究

— 宮崎タンスにおける研究会をめぐって —

下出茉莉／京都工芸繊維大学大学院博士後期課程

はじめに

京都を拠点に活躍した迎田秋悦（1881-1933）は、神坂雪佳の影響を大いに受けたことで琳派に傾倒した蒔絵師として紹介されることが多い。明治後半から大正、昭和初期の京都の美術工芸界において中心的な漆工研究会であった京漆園や佳都美会に所属し、晩年には帝国美術院展に審査員として参加するなど京都を代表する作家として知られる。

秋悦は明治41年（1908）頃から老舗高級家具店の宮崎タンス（現：宮崎木材工業株式会社）の研究会に京蒔絵の名工として加わり、図案家や建築家といった他分野の専門家らと親交を深めながら高級家具の制作を行った。宮崎タンス三代目宮崎平七（1872-1946）のもとで立ち上げられた「婚儀道具研究会」や「家具工芸研究会」といった組織は、美術工芸家を中心とする工芸研究団体が複数存在する当時であって、珍しい試みであった。

本発表では、迎田秋悦が近代京都の漆芸界においてどのような特徴をもつ蒔絵師であったのか、秋悦が深く関わった宮崎タンスでの研究会及び展覧会を通して明らかにしていく。

1. 京都漆芸界と工芸研究団体

明治6年（1873）にウィーン万国博覧会に国として正式に参加して以降、日本国内でも産業振興を目的とした各博覧会や共進会が開かれるようになった。博覧会を経験するにつれ、工芸は産業工芸の振興に重きが置かれるようになり、漆芸においては意匠面での改革が取り沙汰されたことで大きな飛躍を遂げた時代であったとみることができる。

明治中期以降、京都においては図案や作品制作における指導が行われる場として多くの工芸研究団体が発足した。漆芸を研究する団体としては、明治39年（1906）発足の「京漆園」と明治45年（1912）発足の「佳都美会」が代表的で、展覧会の開催や作品販売も行われた。

「京漆園」は当時図案家としても活躍していた浅井忠が主導者を務め、斬新な図案のもとに作品が制作された。「佳都美会」は神坂雪佳が主導者となり、大正期には出品公募制を設けた大規模な展覧会を開催するなど京都工芸界の中核をなす組織へと成長していく。

両組織には、迎田秋悦をはじめ杉林古香や戸島光孚といった若手漆芸家が参加しており、当時の工芸家は、一つの団体に所属し、そこで成果を上げていくのではなく、複数の団体に所属し工芸家間の交流を深めた。

2. 迎田秋悦について

迎田秋悦は、明治14年（1881）蒔絵師であった迎田嘉兵衛の長男として大阪に生まれた。父が勤務していた春井蒔絵工房が倒産したのを機に一家で京都へ転居し、この時から秋悦は父から蒔絵を学び、日本画を三宅呉暁に師事している。

秋悦の特徴を示す代表作として《杉藤蒔絵 絵重硯箱》《網干蒔絵 棚》《牡丹唐草大手箱》などが挙げられる。秋悦の作風は必ずしも一貫しているわけではないが、伝統模様に傾倒し緻密で丁寧な仕事が施された部分や、彩漆を駆使した多彩な表現等は、秋悦が父の嘉兵衛から伝統的な京蒔絵を習得したことや先駆

的な図案研究に没頭した経験をよく示している。また、秋悦は自らも図案をよく手掛け、宮崎木材工業株式会社には現在も秋悦の手による調度図案が『秋悦先生図案集』という形で残されている。随所に琳派の意匠感覚が見受けられることから、神坂雪佳の影響が窺われる。秋悦は神坂に指導を受けるようになって以降、神坂と活動を共にすることが多く、宮崎タンスでの活動もその主要な一つとして捉えることができる。

3. 宮崎タンスと三代目宮崎平七について

宮崎タンスは、京都夷川を拠点とした家具商で、指物職として開業したのち明治13年(1880)に箆笥製造を開始する。明治18年に養嗣子として迎えられた三代目は、明治29年24歳で宮崎平七を襲名している。

三代目平七が立ち上げた主要な研究会及び展示会は、「婚儀道具研究会」「画伯考案書棚研究会」「家具工芸研究会」等で、工芸家に留まらず図案家として神坂雪佳、古谷紅麟が起用され、竹内栖鳳、谷口香崎、上村松園などの画家や、武田五一、本野精吾などの建築家が集められた。三代目平七主催の研究会の作品披露は主に大阪で開かれていたため、新たな販路の獲得や高級家具店としての京都宮崎タンスの名を広める機会となった。

4. 宮崎タンスの研究会に見る迎田秋悦の役割

明治41年(1908)創設の「婚儀道具研究会」は、婚儀調度のような高級家具を生産することで、家具商としての活路を見出す最初の取り組みであった。この時、迎田秋悦は宮崎タンスの漆芸指導をしていた稲垣和三郎により、京蒔絵の名工として宮崎タンスに紹介されている。これ以降、秋悦は宮崎タンスの蒔絵制作を担当し、大正4年(1915)の「画伯考案書棚展示会」では、著名な画家がおこ

した図案をもとに書棚の蒔絵を手掛けている。

昭和4年(1929)には、現代の生活に適合する家具を研究する「家具工芸研究会」が発足し、武田五一、本野精吾ら監修のもと昭和8年に梅田阪急百貨店で開催された展示会では、室内空間を展示するという新しい試みが行われた。洋家具を設置した書斎や客室の展示が目立つ中で、秋悦はこの時日本の伝統空間として茶室を手掛けている。茶室のコンセプトにおいて秋悦は、室内にいる人の自由さや室内空間の調和を一番大切にしたいと語っている。

この展示は、秋悦が宮崎タンスにおいて伝統的な意匠面を担う役割を果たしていたことを示すと同時に、伝統的な蒔絵の在り方を現代へ適応させる工夫を凝らしていた制作姿勢を物語っている。秋悦は、自身の作風においても伝統意匠と調和を重要視しており、家具工芸研究会での茶室の展示は、近代京都の漆芸界における秋悦の立ち位置を強く示しているように思われ、秋悦の制作活動の性格を示す一例としてみる事ができる。

おわりに

本発表では、迎田秋悦の活動の一環として宮崎タンスにおける研究会及び展示会を採り上げた。秋悦は、近代京都の漆芸界の中で、古典に傾倒した作風と技巧的な表現を得意としながらも、古典を基調に、現代に適応する新しい蒔絵の表現を模索した。家具工芸研究会のような室内空間を展示するという新しい試みは、作品が置かれる空間と作品の調和を重視した秋悦の制作姿勢を示す絶好の機会であったとみることが出来る。今まで迎田秋悦と宮崎タンスの繋がりが詳細に言及されることはほとんどなかったが、三代目宮崎平七の下での活動は、秋悦の作家としての特徴を示す主要な活動として位置づけられる。